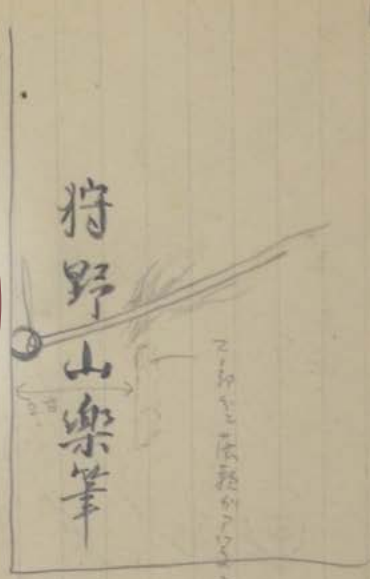


# 記憶と絵画

# ド イ ツ ギ ヨ シ 士居次義



5日間限定  
調査研究ノート  
コレクション  
初公開



2015年1月6日(火) - 1月10日(土)

会場 | 京都工芸繊維大学 美術工芸資料館  
開館時間 | 午前 10 時から午後 5 時まで  
(入館は午後 4 時 30 分まで) 入場無料  
住所 | 〒 606-8585 京都市左京区松ヶ崎橋上町  
電話番号 075-724-7924 ファックス 075-724-7920  
<http://www.museum.kit.ac.jp>

京都工芸繊維大学  
美術工芸資料館  
MUSEUM AND ARCHIVES

いきなり私事で恐縮ですが、1995年に京都工芸繊維大学に赴任する際、当時の教授であった宮島久雄先生から声を掛けていただきました。口説かれたわけではないのですが、そのときの殺し文句が「土居先生の蔵書があるから」でした。日本美術史を研究しようという者にとって、土居次義先生のお名前が、長谷川等伯や狩野山楽の名とつねにセットでしたから、これは魅力的なお誘いでした。

その言葉に乗せられて本学に赴任することになるのですが、実際には、土居先生のご蔵書は、ご遺族が三竹園文庫というかたちできちんと管理されており、本学の図書館にあるのは、いわゆる「ダブリ」の本が多かったのです。これには多少がっかりしたのですが、その数年後、三竹園文庫を管理されていた村上幸三郎様より京都工芸繊維大学に土居先生のご蔵書についての打診がありました。はじめは図書館が対応しており、あまりの冊数の多さに尻込みをしていました。その話を聞き、この機会を逃してはならないと、交渉の席に加えていただき、まずは、文庫のご蔵書を詳しく調べることになりました。

村上様が作成されたリストはあったものの、実際に大学院生とともに三竹園文庫を訪れたときにはその数に圧倒されました。図書館が尻込みをするのも無理はないと思いました。しかし、当然ですが、ご蔵書のなかにはわれわれにとって欠かすことのできない基本図書や、全国各地の展覧会図録、貴重な古書などがあり、まさに宝の山といった感がありました。なかでも、土居先生の代名詞ともいえる「モレリ法」の基礎となった細部写真の数々は、研究の現場をまざまざと伝えてくれる臨場感のあるものでした。そして、その臨場感をさらに高めてくれたのが、土居ノートでした。本棚にずらりと並んだ手書きのノートを見て、文字通り仰天した記憶があります。

結局、第一にノート類、そのあとに、古書、写真、図録類というかたちで、三竹園文庫の中核部分を京都工芸繊維大学に寄贈していただくことができました。この貴重な資料をできるかぎり有効に活用してゆくことが、それ以後の課題でした。幸いに、狩野永良の『画伝集』が紹介され（多田羅多起子、『美術フォーラム21』23号、醍醐書房）、さらに、2011年の「長澤芦雪」展（MIHOミュージアム）、2013年の「狩野山楽・山雪」展（京都国立博物館）では土居ノートが展示されることになり、多くの方々にその存在と素晴らしさを知っていただくことができました。狩野山楽の作品と並んでご自身のノートがガラスケースのなかで展示されたことに土居先生がいまどんな思いでいらっしゃるかは知る由もありませんが、価値あるものが正当に評価されて、日の目を見たことは、研究者の一人としてこれ以上ない喜びでした。

いままた、この土居ノートにさらなる光が当てられて、後進の研究者への指針となることは、大げさではなく日本の美術史研究にとって大変有意義なことだと思います。

芸術祭Ⅱアドバイザー 並木誠士

## 土居ノート・プロジェクト

土居次義の方法は何よりも実作品の徹底的な観察であり、調査ノートを見ていると、その「目の記憶」を追体験することができます。この体験を何とか共有できないかと思っていた頃、大阪大学で文化庁の芸術支援事業に申請することになり、展覧会を企画しました。ただ、この膨大なノートを一人で実作品にてらして点検することは不可能であり、次の方々の協力をえしました。土居ノートの寄贈を受け現在管理されている並木誠士氏（京都工芸繊維大学）、京都国立博物館で『狩野山楽・山雪展』を実行した山下善也氏（東京国立博物館）、その展覧会にともに関わった五十嵐公一氏（兵庫県立歴史博物館）、近代絵画の専門家の川西由里氏（鳥根県立石見美術館）。そしてこの企画全体を下支えしてくださった多田羅多起子氏（京都造形芸術大学）、大橋あきつ氏（宮崎県立美術館）、波瀬山祥子氏（大阪大学）です。また、展示には、芸術祭を企画運営しつつアート・マネジメントについての人材を育成するプログラムである、本芸術祭の受講生のみなさまのご意見を反映させています。この展覧会が近世絵画をより深く見る縁となれば幸いです。

芸術祭Ⅱ事業担当者 奥平俊六



明治39年(1906)大阪に生まれる。昭和6年(1931)京都大学文学部哲学科美学美術史を卒業。昭和11年(1936)恩賜京都博物館鑑査員、昭和21年(1946)同館館長。昭和24年(1949)京都工芸繊維大学教授となり、意匠工芸科創設に関わる。昭和45年(1970)同校名誉教授。平成3年(1991)没。

主著：『山楽と山雪』桑名文星堂、1943。『長谷川等伯・信春同人説』文華堂書店、1963。『近世日本絵画の研究』美術出版社、1970。『水彩画家 大下藤次郎』美術出版社、1981。



土居次義 (1906-1991)



土居次義「たびぐさ」より

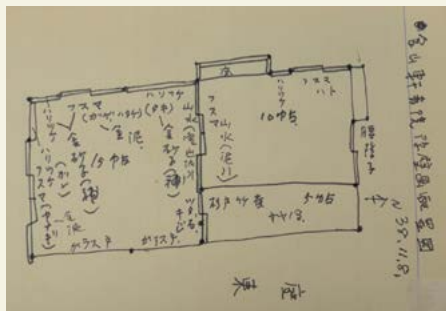


大下藤次郎「スケッチブック No.1」より

本展では、評伝執筆のためのノートや、夫人から託された大下藤次郎の遺作などとあわせ、調査の合間に描いた土居氏自身の風景画を展示します。障壁画調査ノートに見られる巧みなスケッチは、少年時代より訓練を重ねた模写や風景写生の賜物といえます。絵筆を持つ美術史研究者という側面を紹介することは、土居次義氏の研究スタイルを知るための一助となることでしょう。(川西)

## 水彩画家大下藤次郎と土居次義氏





長浜・大通寺 含山軒障壁画配置図



「寒山拾得図」狩野山雪筆(京都・真正極楽寺)調査

記憶に新しい「長沢芦雪」展(MIHO MUSEUM、2011年)、「狩野山楽・山雪」展(京都国立博物館、2013年)。これら話題の展覧会に、土居ノートは出品されました。これらの画家たちについて、研究の基礎を固めたのが、土居次義氏だったからです。

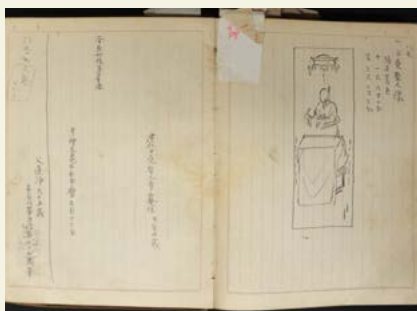
ここでは、山楽と山雪に注目します。狩野派400年のピークといえば桃山時代の狩野永徳と山楽。知名度の高さに反し永徳の現存作品は数点のみですが、永徳の真の後継者、狩野山楽(1559-1612)には、数々の優品が現存しています。一方いま、若沖・蕭白といった、江戸中期、京の画家

たちの奇想天外な造形が大人気。その先き駆けが、山楽の後継、狩野山雪(1590-1651)にほかならないのです。

今日の山楽・山雪研究は、土居次義氏の研究の上に成り立っています。氏は、実作品の調査、描法分析により、両画家の基準となる作品を数々見出し定めました。研究はつねに作品調査から。その熱いまなざしをノートから窺います。〔山下〕

## 狩野山楽・山雪、魅力の絵画へのまなざし —今日の研究は、ここから始まった—

「等伯・信春同人説」は数多い土居氏の研究成果のなかでも代表的な存在です。等伯は長谷川等伯のこと。信春は能登に残る仏画を描いた絵師で、江戸時代の画伝類では等伯の息子久蔵の画名と考えられていました。能登で仏画を描いていた信春と、京都の寺院の襖に名品を残す等伯を結びつけたのは、本法寺に伝わる「日堯上人像」の調査がきっかけでした。この絵に書かれていた「父道浄六十五歳」「長谷川帯刀信春三十四歳筆」という文言から、信春が道浄を父と呼んでいることが判明。この肖像が描かれたと考えられる元亀3年(1572)に信春も等伯も34歳であることから、信春は久蔵ではなく等伯とする説が成立したのです。ノートに走り書きされた「信春≠久蔵」の文字は、その決定的瞬間を伝えています。今回は、この説についてまとめた『等伯信春同人説について』の原稿とノートを並べて展示します。〔多田羅〕

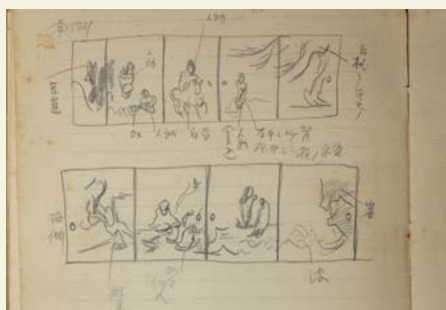


京都・本法寺「日堯上人像」調査

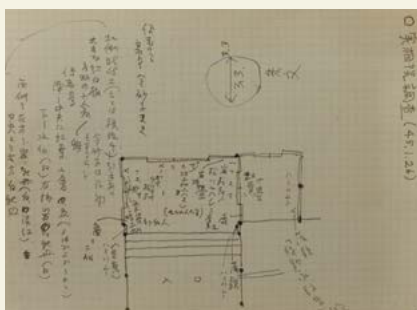


『長谷川等伯・信春同人説』清書原稿

## 等伯・信春同人説、その決定的瞬間！



「群仙図襖」狩野永敬筆(京都・実相院)調査



京都・実相院 障壁画配置図

京都岩倉の名刹実相院には京狩野四代永敬(1662-1702)の襖絵があります。土居氏の「実相院の狩野永敬」(『美と工芸』159号)は、その躍動感あふれる画風を紹介した画期的な業績であり、昭和10年と同45年のノートはその調査の実態を知るための貴重な資料です。ただ、そこには永敬画以外の襖絵に関する記録も含まれています。土居氏の論文では、実相院が享保5年(1720)御所より拝領という寺伝のみ簡単に紹介されていますが、おそらくは襖絵の全体構成についてもいざい言及する予定であったのではないかと推測されます。実相院の建築の主要部分は宝永6年(1709)

に造営された東山院の中宮承秋門院の御所が移されたものですが、その襖絵は本来東山院御所のものであった可能性が考えられます。狩野探信、主信、洞春など江戸狩野の主要な画家たちが関わったものであり、それらを明らかにすることは私たちに遺された宿題かもしれません。なお、「実相院展」が今秋京都文化博物館で開催される予定です。〔奥平〕

## 実相院の京狩野と江戸狩野



大津・法明院 障壁画配置図



明石・業師院 障壁画調査 石田幽汀筆

土居次義氏が残した研究成果は膨大です。そのため、重要なのにあまり注目されていない研究も多い。そんな一つが鶴沢派研究です。

18世紀後半の京都で、圧倒的な人気を得ていたのは円山応挙でした。その応挙の師匠は石田幽汀、そして幽汀の師匠は鶴沢探鯨です。つまり、応挙は鶴沢派の流れをくむ絵師ということになります。その鶴沢派の絵師たちに、いち早く着目したのが土居次義氏でした。

面白いことに、土居次義氏は応挙、幽汀、鶴沢家という順番で鶴沢派を研究しています。そして、

鶴沢家解明のための手がかりを得て、一気に鶴沢派研究が進みます。いつもながら土居次義氏の行動は早く、精力的でした。土居次義氏による鶴沢派研究がなければ、円山応挙そして18世紀の京都画壇の研究は、今ほど豊かなものにはならなかったはず。〔五十嵐〕

## 鶴沢派研究の先鞭

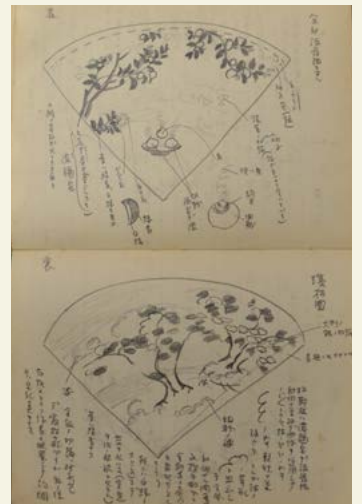
## お見事！スケッチ

思わずため息がもれるような見事なスケッチは、土居ノートの大きな特徴です。調査中、作品を前にして手早く的確に特徴を写し取ったもの、調査後の写真を見ながら、時間をかけてまとも直しをしたもの。土居氏のスケッチは、その時々に応じて筆の速さや粗密を変え、目的に応じた記録がなされています。作画を体験するような完成度の高いスケッチや、鉛筆のかたどりと塗りで筆の癖を再現したサインのスケッチは、目と手が連動して研究が進展していった過程を如実に伝えてくれます。

現在ではデジタル複製技術が飛躍的に進展していますが、実物調査なしに研究は進められません。作品調査の際には、その場でしか得られない情報を中心に、手早く手元に書き留める必要があります。土居ノートのスケッチと書き込みからは、現場でどこに注目していたかという研究者の視点と、素早く的確に写し取る技を知ることができます。〔多田羅〕



「繫馬図絵馬 狩野山楽筆」調査



「阿須賀神社 彩絵繪扇」調査



虎の足の比較



岩のこぶ、皴法

## 細部へ注目する理由

調査記録のなかには、虎の足ばかり描き止められた頁や、岩のこぶのスケッチばかり続く箇所があります。なぜこのような細部に注目したのでしょうか。それは、意図しないところに現れる画家の癖を見抜き、サインのない襖絵の筆者を特定するという目的があったためです。

京都には近世初期の障壁画が数多く伝来しますが、その大部分には画家の署名がなく、狩野永徳や狩野山楽といった著名な画家が筆者として伝えられる例が多くありました。土居氏は、それら障壁画の筆者を実証的に再考する過程で、「木の根の形」「岩のこぶや皴の描き方」など各所に共通するモチーフや、「虎の足」「人物の耳」など細部にあらわれる癖を、画家特定の判断材料としていたのです。

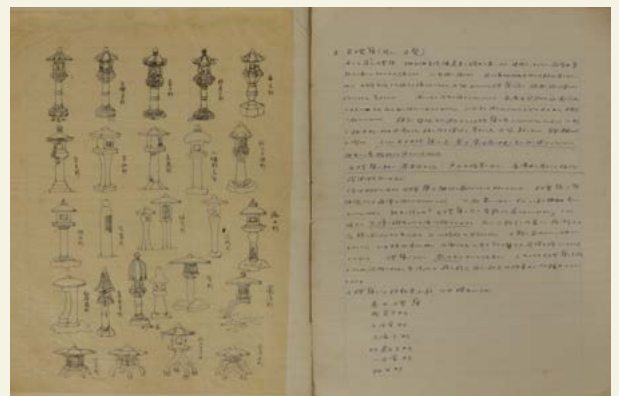
このような手法は、土居氏の考案ではなく美術史の基本的な見方のひとつですが、土居氏の場合は、スケッチによる記憶の固定と蓄積により、その手法を徹底していました。〔多田羅〕

## 手で写すこと—受講ノートと文献資料

土居ノート全224冊の実に3分の1ほどを占める学生時代のノートから、受講ノートや資料を筆写したノートを紹介します。

土居氏が学生生活を送ったのは、昭和3年(1928)から昭和6年。受講ノートは小さなペンでぎっしり書き込まれています。記述はそのまま本になりそうな内容で、講義を逐次聞き書きしていた当時の受講スタイルがうかがわれます。

研究上必須となる参考文献の手控えをとる作業も、容易ではありません。ひたすら自らの手で写すしかなく、複写機の利用に慣れたわたしたちには考えられないような手間がかかります。ノートに残る資料の筆写には、トレーシングペーパーを使って丁寧に写し取られた図も含まれます。ひたすら手を動かし、情報・知識を自分のものとしていたかつての学び方は、写すことが極めて簡易化した現代のわたしたちに多くのことを示唆してくれます。〔多田羅〕



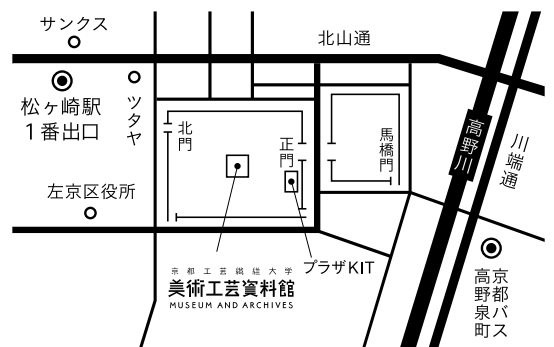
トレーシングペーパーに写し取られた燈籠の型分類

### リサーチセミナー「土居ノートと美術史研究」

日時 2015年1月10日(土)13:30~16:30  
 会場 京都工芸繊維大学美術工芸資料館  
 定員 30名(受講生対象)  
 講師 並木誠士(京都工芸繊維大学)  
 奥平俊六(大阪大学)  
 山下善也(東京国立博物館)  
 五十嵐公一(兵庫県立歴史博物館)  
 多田羅多起子(京都造形芸術大学非常勤講師)



声なき声いたるところにかかわりの声そして私の声 芸術祭Ⅱ  
 主催：大阪大学文学研究科  
 助成：平成26年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」  
 「劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業」  
<http://koefes.org>



- JR京都駅より  
市営地下鉄烏丸線「国際会館」行きに乗車(約18分)  
「松ヶ崎駅」下車、徒歩約8分  
「松ヶ崎駅」の「出口1」から右(東)へ約400m、  
四つ目の信号を右(南)へ約180m
- 京阪「出町柳」駅5番出口から  
京都バス「大原」行、「岩倉実相院」行、「岩倉村松」行に乗車、  
「高野泉町」下車、橋を渡り左へ約200m(徒歩約8分)